

長野県における「道の駅」の取組について

長野県 建設部 道路管理課

1. はじめに

「道の駅」は全国で1,193駅（令和3年6月時点）あり、本県では、41市町村に52駅が登録されており、全国で3番目です（下図）。

「道の駅」は、当初は、通過する道路利用者のサービス提供の場でしたが、「道の駅」の魅力が増すにつれ、「道の駅」自体を目的地とした観光客も増え、観光の拠点としての強化が図られてきています。

「道の駅」は今、第3ステージと呼ばれる新たな局面を迎えており、本県においても、トイレのリニューアル、サイクルステーション機能の充実、道の駅の連携・協働への支援など、「地方創生・観光を加速する拠点」に向けた取組を進めており、今回は、それらの取組についてご紹介します。



図：長野県内の道の駅の位置図

2. トイレのリニューアルについて

誰もが安心して立ち寄れる休憩施設である「道の駅」にとって、トイレは必要不可欠な施設であり、高齢者、子育て世帯、外国人観光客、障がいのある方などあらゆる人々が利用しやすい快適な施設であることが求められています。

現在、本県では11駅のトイレについて改修を進めており、トイレのアクセシビリティの向上を目指しています。

(1) 清潔で衛生的なトイレ

① 清掃方式の乾式化

従来、道の駅トイレは不特定多数の利用者への対応や清掃効率の観点から湿式清掃が主流となっていました。しかし、濡れたままの状態では菌が繁殖しやすいため、便器の洋式化を図りつつ、清掃方法は水を撒かずにモップでふき取る乾式の清掃方式への移行を基本としています。

また、壁掛けタイプの洋式便器及び小便器を採用し、汚れが溜まりやすい床と器具との設置面をなくす構造としています（下写真）。



床との設置面をなくした便器の採用

② 衛生的に優れた内装材の採用

内装は、床材、壁材に抗菌・防カビ性の高い材を積極的に取り入れることで、菌やウイルスの発生を抑制し、衛生環境を保ちやすくしています（右写真）。

③ 非接触型の器具の採用

手動水栓等の器具類には多くの菌が付着していることが実証されています。そのため、出入口も含め、自動化された非接触型の器具を積極的に採用することにより、「洗う」→「トイレから出る」までの一連の動作をすべて非接触とすることで、利便性向上に加え、コロナ禍でも衛生的な利用ができるようにしています。



床面に抗菌・防カビ性の高い材や
汚れが付きにくいシートを採用

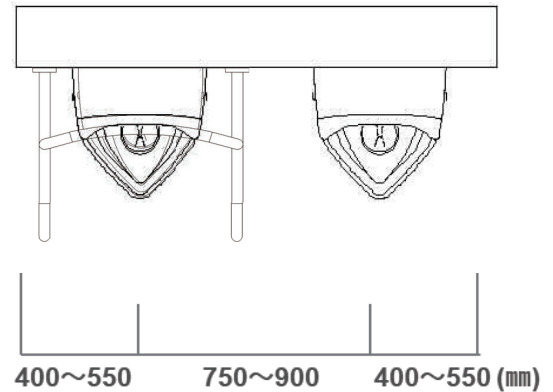
(2) 快適なトイレ

① 混雑を回避する便器

混雑時でもスムーズな利用が行えるよう連続した洗浄が可能な便器（フラッシュタンク）を採用しています。

② ゆとりのあるスペース

ブース等の各器具配置について、人の動きを考慮した器具間隔を定め、既存の便器数を確保しながら使いやすい配置としています（右図）。



図：男子便器の設置間隔

③ 温水洗浄便座

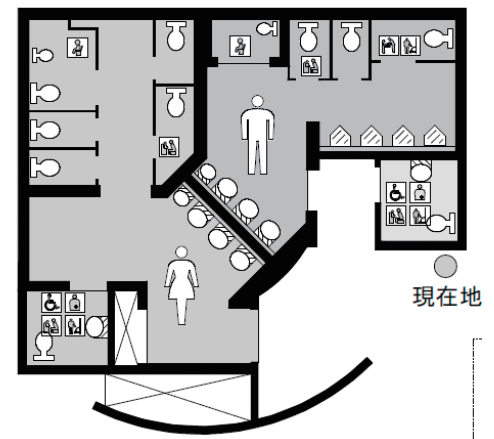
家庭においても一般的に使用されている、温水洗浄便座を採用しています。

(3) ユニバーサルデザイン

① 分かりやすい表示方法

イラストやピクトグラム（JIS 適応）の統一化を図り直感で分かりやすくなるよう配慮しています。

また、トイレ入口へピクト付き平面図を配置することでどのような機能のトイレがあるのか入室前に明確となるようにしています（右図）。



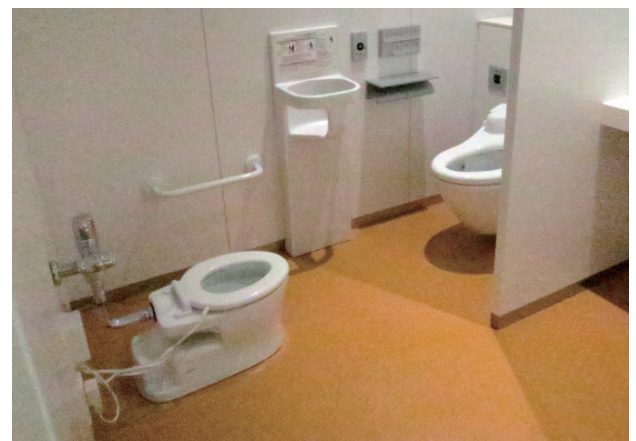
図：ピクト付き平面図

② バリアフリートイレの設置

車いす利用者・オストメイト利用者・要介護者など様々な身体状況の利用者を想定したバリアフリートイレを設置し多様な利用ができるようにしています。

③ 子ども連れ利用者用トイレの設置

子どもの体格に合わせた器具を設置することで、子ども連れ利用者が一緒に利用できるようにしています（右写真）。



子ども連れ利用者用トイレ

(4) ゼロカーボンの推進

① 照明器具のLED化

電気設備機器を全体的に改修する計画とし、灯具については交換頻度が少なく消費電力の少ないLED照明としています。また、人感センサーを採用することで省電力化を図っています。

② 節水タイプ衛生器具の採用

トイレ内の器具は洗浄に多くの水を使用するため、節水型の器具を採用しています。これにより、既存のものから30～50%の水使用量の削減を期待しています。

(5) その他

道の駅管理者との打合せの中では、不特定多数が利用し目が届かないトイレでは異物の混入やいたずらにより便器のつまりが発生しやすいとの意見がありました。このため、つまり除去作業が容易にできるようメンテナンス用の掃除口付便器を採用しています（右写真）。



掃除口付き便器の採用

3. サイクルステーション機能について

本県に存在する3つのアルプスの雄大な景観や起伏に富んだ地形は、サイクリストにとって大きな魅力を持っています。

本県では、令和元年6月に設立された「Japan Alps Cycling Project」を中心に、官民連携によるオール長野でサイクルツーリズムの推進に取り組んでおり、県内を周遊するサイクリングのモデルルート「Japan Alps Cycling Road」（次頁図）を始め、県内各地でサイクリングルートを設定し、整備を進めています。

「道の駅」においても、サイクルステーション機能を付加し、サイクルラックを設置するなど、サイクリストにとって快適な環境づくりを推進しています。

本県の南部に位置する下伊那群豊丘村にある道の駅「南信州とよおかマルシェ」のとなりには、「とよおか旅時間」が今年5月に新設され、自転車の貸出や販売、モデルコースの紹介を行っており、道の駅と連携した相乗効果が期待されています（下写真）。

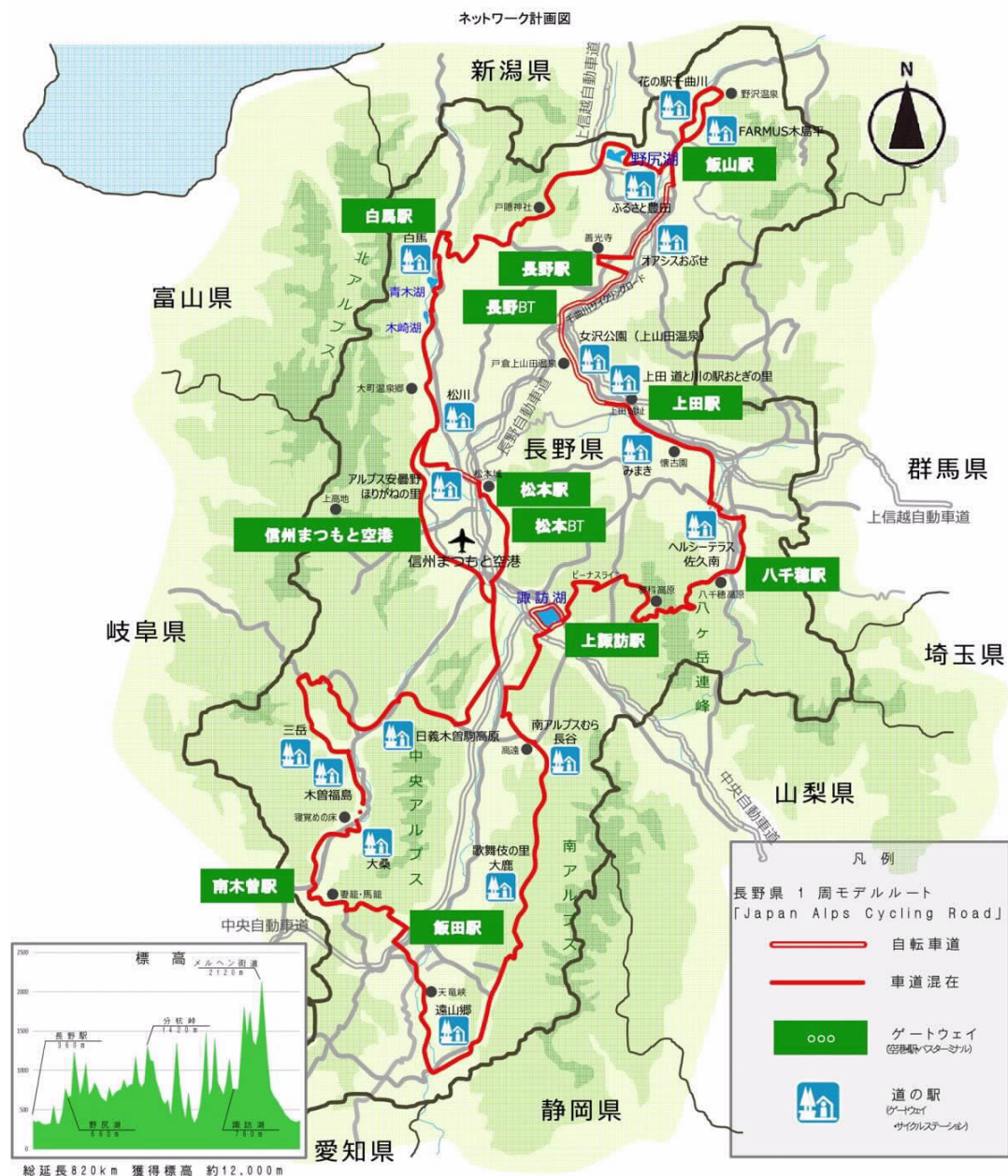


道の駅「南信州とよおかマルシェ」に設置した
サイクルラック



隣接する「とよおか旅時間」

Japan Alps Cycling Road



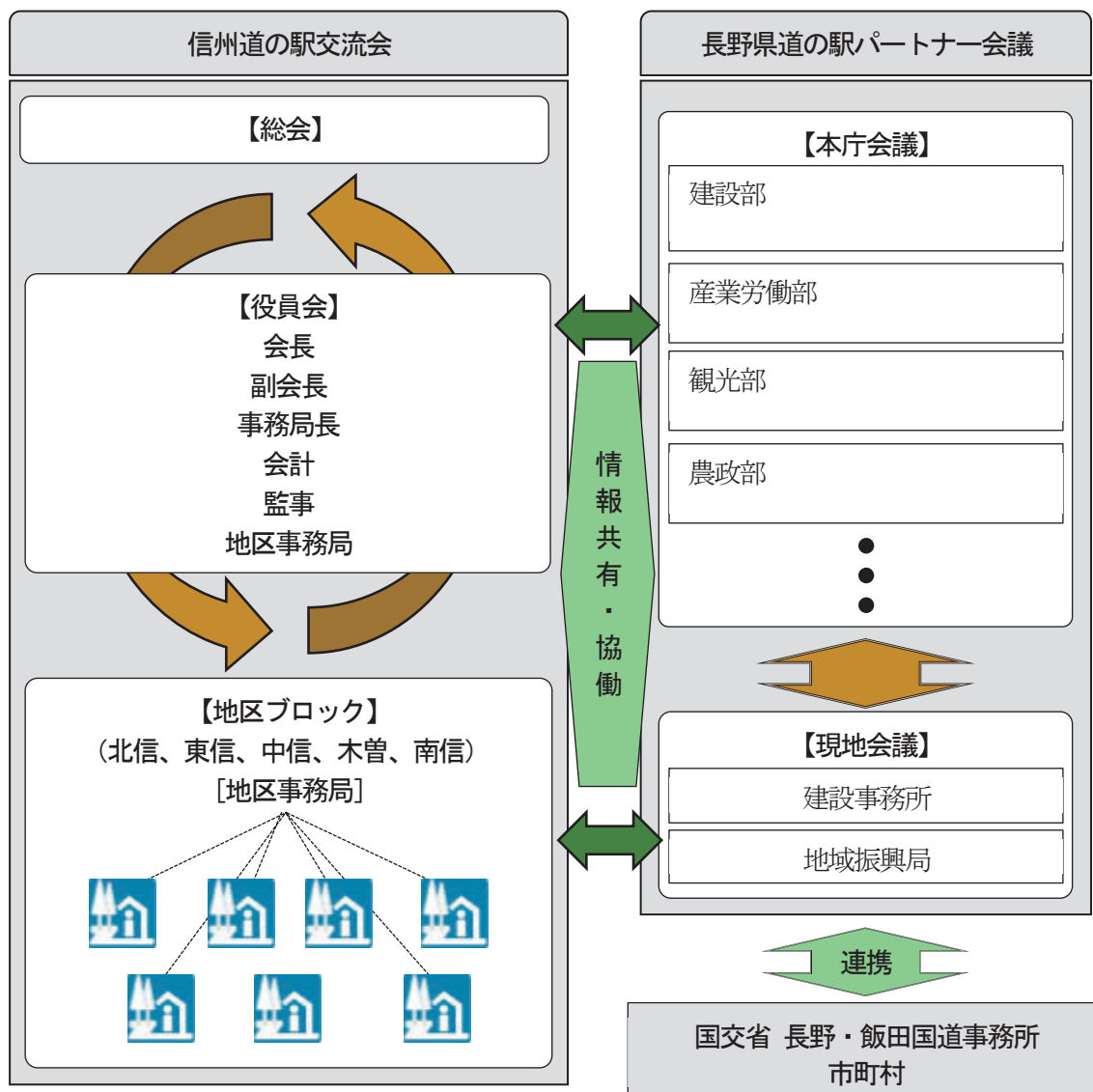
☒ : Japan Alps Cycling Road (Ver.1.0) マップ

4. 「信州道の駅交流会」と「長野県道の駅パートナー会議」

道の駅の魅力と発信力の向上に向け、県内の道の駅の連携・協働を目的に、道の駅運営者が、自らの発案により、「信州道の駅交流会」を昨年 11 月に設立しました。

この交流会が、デジタルスタンプラリーを実施したところ、「この企画がなければ訪れなかった」「いろいろな物産を購入できて楽しかった」「家族と一緒に出かけられた」など、多くの方々から好評をいただきました。

本県では、この交流会の取組を支援するため、各部局や現地機関で構成する「長野県道の駅パートナー会議」を今年２月に設置しました。このパートナー会議を通じて部局横断でのソフト面の支援を継続して行う予定です。



図：「信州道の駅交流会」と「長野県道の駅パートナー会議」

5. おわりに

「信州道の駅交流会」という「道の駅」同士の繋がりができたことで、「長野県道の駅パートナー会議」で官民の協働により、今後も多様な主体と連携した様々な施策が展開できると考えております。

コロナ禍が収束し、国内やインバウンド需要の回復に備え、元気に稼ぐ地域経営の拠点として力を高めるとともに、新たな魅力を持つ地域づくりに向け、今回紹介した取組を引続き進めてまいります。